

どこなのか分からない所に行く

イーシャ・サーデサイによる再話

農夫は、オリーブを摘んで圧搾していました。手、腕、体全体に芳しいオリーブ油の香りをまといながら、せっせと着実に仕事を続けていました。太陽は地平線近くまで沈んでいました。柔らかな光が空に広がると、農夫は立ち止まり、彼の農園——なだらかに起伏している丘、オリーブの木々、妻と暮らしている小さな家——を見渡しました。彼は、ここは世界中で最も美しい場所だと信じていました。

「エミリオ！」彼の妻、ヘレナが家から彼を呼びました。「エミリオ、急いで戻って！ 誰がいらしたと思う？」

エミリオが丘を下って行くと、馬車の輪郭が見えてきました。その後ろには、紫色の絹で作られた旗が掲げられていました。それには王家の印が付いていました。

エミリオは驚いて眉を上げました。「王様？」と、彼は思いました。「うちの農園に来ている？」彼は足を速めました。案の定、彼が家に近づくと、訪れているのは間違いなく王であることが分かりました。

「陛下」と、エミリオは言いました。「この栄誉はいったい何によるのでしょうか？」

「ごきげんよう、エミリオ」と、王は言いました。「ここにいるおまえの妻が」と、近くに立っていたヘレナを示しました。「農園のことを話してくれた。私は馬車で通り掛かったのだが、このあまりの美しさに気づかずにはいられなかったのだ」

「ありがとうございます、陛下」と、エミリオは言いました。「私たちはここでオリーブを育て、毎年市場でオリーブ油を売っています」

王は農園を見回すと、近くに置かれていた、ふたの開いている幾つかの油のたるに視線がくぎ付けになりました。そのオリーブ油は液状の黄金のようで、その周囲に香りが渦を巻き、草木の甘さを醸し出していました。王はこれまでに、数え切れない魅惑的な油と出合ってきました。しかし彼は、このようなものに遭遇したことは一度もない、と確信しました。

王はエミリオとヘレナに振り向きました。「この土地が欲しい」と、彼は宣言しました。「そして、ここでおまえが生産しているすべてのオリーブと油も」

エミリオは度肝を抜かれました。「お、恐れ入ります、陛下」と、彼は言いました。「それでも、この土地を差し上げることはできません」

「差し出せないとは、どういうことだ？」 王は信じられませんでした。彼は自分の望みが拒否されることに慣れていませんでした。

「陛下、この農園は家族に何世代にもわたって引き継がれているものです。ここは私たちの故郷です。手放すことはできません。どうぞ、他にできることでしたら何でも、私は喜んで骨身を惜しまず尽くします」

王は少しの間、何も言いませんでした。「もちろん、この土地を奪い取ることはできる」と、彼は心の中で思いました。「結局のところ、私は王なのだ」。しかし、彼はその結果として起きるであろう、圧制へのあらゆる非難について考えました。それは反対勢力に火を付けるだろう。いや、いや、もっと賢明にならねばならない。

「よいか」と、王は言いました。「オリーブの農園を私に渡せないのなら、おまえは1年間私の土地で働かねばならない。1年間働いて、私が与えるすべての仕事をやり遂げるのだ」

エミリオはこの命令を受け入れ、翌朝、宮殿の敷地に向かいました。

しかし到着した時、目にしたものの衝撃で、彼は叫びました。木々はすべて痩せ細って病弱に見え、葉は黄色くしおれ、ぼろぼろの根っこが地面から突き出ていました。土は砂のように乾いていました。

エミリオがこの光景を見ていると、王の従者の一人が彼の後ろから近づいて来ました。

「王様は、2日でこれらの木を生き返らせるよう、命じられた」と、従者は言いました。

「2日で?!」 エミリオは叫びました。「どうやって…?」

「2日で」と、従者は繰り返しました。「ほら、これを」。彼はエミリオの手に、ぼろぼろの鋤(すき)を押し付けました。

エミリオは目の前の小枝のような木々の方を向き、観念して肩を落としました。どうすればいいって? 彼は仕事を始めたのです。

その日の残りの時間全部と夜通し、彼は木々の世話をし、土を回復させ、大地に活力が戻るようにと、精を出して働きました。日中の日差しは厳しくて和らぐことはなく、夜の湿度はまわりついて、どちらがいいとも言えませんでした。

2日目の終わりまでには、エミリオは泥まみれになって、疲れで腰が曲がっていました。しかしともかく、——奇跡的に——彼はそれをやり遂げました。大地は再び柔らかくしっとりとなりました。木々は枯れた枝や葉が取り除かれ、生き返ったようでした。

宮殿から見ていた王の表情は不満げでした。

「どうなさいましたか、陛下」と、従者は尋ねました。「エミリオに木々を生き返らせるようお望みだったのではありませんか？」

「そうではない」と、王は答えました。「あの男を死に追いやりたかったのだ。そうすれば、彼の土地を奪い取ることができるからだ」

「陛下」と、従者はためらいながら言いました。「それは必要でしょうか？ 間違いなく、他にも同じように良い土地があるのではありませんか？」

「いいや！」と、王は言いました。彼はこの時点で貪欲さにすっかり負け、理性に耳を傾けられなかったのです。「おまえはあのオリーブを見ていないし、その油の香りも体験していないのだ。行け——あの男をもっと働かせるのだ」

そうして、何日も、何週間も、そして何カ月も過ぎました。仕事はますます骨の折れる、ばかげたものになっていきました。王は、80本の木を新しく植えるよう要求しました。さらに80本を引き抜かせました。毎回、エミリオは何とか求められたことをやり遂げました。しかしそのたびに、過労で身体が壊れるのではないかとも思いました。

「王様は、僕を死ぬまで働かせようとしている！」ある晩夕食の時に、エミリオは妻に言いました。彼は両手で頭を抱えました。

「僕たち二人とこの農園だけだった時の人生の方がずっと良かった」と、彼は嘆息しました。

「そうね、多分」と、ヘレナは言いました。「でも、後ろを振り返っても何の意味があるの？　これが人生で今あなたが置かれている状況でしょう」

「僕はこの現状から逃げ出したいんだ」と、エミリオは言いました。

「どうやって逃げ出すというの？」と、ヘレナは尋ねました。「王様の領地は見渡す限り広がっているし、彼の法律も同じように支配しているのよ」

「何か切り抜ける方法があるに違いない」

ヘレナはとても賢明で鋭敏な女性でした。「方法は終えることよ、エミリオ。あなたはあなたのやるべきことをやらなければ。前も後ろも見ないで。ただ、自分の仕事をやり続けて」

そこでエミリオは、そのようにやり続けました。彼は、毎朝早く出勤し、夕方遅くに帰宅しました。目の前の仕事がどんなに大変でも、どんなに信じられないと思えても、エミリオはそれを完遂する方法を探し出しました。

「これでは全くらちが明かない！」　イライラしながら、王はとうとう従者に告げました。「この男を排除する方法を、他に探し出すのだ」

「そうですね、いい考えがあります」と、従者は王に言いました。彼がそれを告げると、王はうなずきました。

翌日、従者は庭にいるエミリオを訪れました。

「ごきげんよう、エミリオ」と、彼はてきぱきと言いました。「王様からの命令が下っている」

「はい、何でしょうか？」

「王様の言葉を伝える。『どこなのか分からない所に行け。何なのか分からないものを持ち帰るように』」

「行く——すみません、何と？」 エミリオは当惑して尋ねました。

「どこなのか分からない所に行け。何なのか分からないものを持ち帰るように」

エミリオは従者に向かってぽかんと口を開けました。「ど、どうやってどこなのか分からない所に行けというのですか？ それに何なのか分からないものを持ち帰るですって？」

「私はただメッセージを届けているだけだ」と、従者は言いました。「ぜひとも成功を祈る」。そう言って、彼は立ち去りました。

その夜遅く、エミリオは妻のヘレナに彼の窮状を話しました。再び彼は両手で頭を抱えました。

「前に同じことを言ったけれど、これは本当に不可能な仕事だ」と、エミリオは言いました。「どこなのか分からない所に行け？ 何なのか分からないものを持ち帰る？」

ヘレナは唇をすぼめました。彼女は真剣に考えていました。「難問だわ」と、彼女は言いました。「でも、あなたを助けてくれる人がいるかもしれないわ」

「そうかな？」 エミリオは顔を上げて言いました。「誰だろう？」

「賢い老女のことについて人々が話しているのを聞いたことがあるの。彼女は、探し求めている人たちを助けると言われているわ」

「では、どこでその賢い老女を見つけられるんだい？」

「誰もよく分からないの。でも私が聞いたのは、森を通して歩いて行って、そして森を抜けてもっと先、今少し行ったら、彼女の家が見つかるということよ」

エミリオは納得していないように見えました。「聞いて」と、ヘレナは優しく言いました。「その賢い老女に会うべきよ。彼女があなたを助けてくれる気がするわ」

そうして、疑問や疑いを抱きながらも、エミリオは出発しました。彼は森の中を重い足取りで歩き、そして、森を抜けても歩き続けました。そして、歩きました。そして、さまよいました。どのくらい時間がたったのかも分からなくなりました。もうほとんどあきらめかけた時、はるか向こうに小屋のようなものを見つけました。窓には光がちらちらしていました。

「あそこがそうかな？」と、彼は思いました。「賢い老女の家？」 彼は走って行って、扉をたたきました。

扉が開き、その入り口に、銀白の髪を頭に頂き大変細かいしわに刻まれた顔をした女性が立っていました。彼女には、説明のつかない輝きがありました。エミリオが見たことのなかったよう

なものです。それはまるで彼女の存在そのものを通して太陽が輝いているようでした。あるいは、それは月だったかもしれません。彼女の目の中には知者のしるしがありました。

「はい、あなた」と、彼女は言いました。柔らかく深い声でした。

「お願いします」と、エミリオは言いました。「あなたが私を助けてくれるだろうと願っています」。なぜか、彼はこの女性に話せると感じ、もし状況を話したら彼女は理解してくれると感じました。そこで前置きなしに、彼はすべての物語を話したのです——彼を消耗し切るまで働かせている王のこと、ますます不可能になってきた数々の仕事、そしてついにこの指示——「どこなのか分からない所に行け。何なのか分からないものを持ち帰るように」

エミリオがすべてを話し終わると、女性は片手を彼の肩に置いてほほ笑みました。

「だからここに来たんですね」と、彼女は言いました。「ここで待っていて」。彼女は家の中に消えました。

少しして、彼女は小さな包みを持って扉の所に戻って来ました。それは茶色の紙できれいに包まれた物でした。

「あなたは自分がどこにいるか分かっていますか？」と、彼女はエミリオに尋ねました。

「あなたの小屋にいます」と、彼は言いました。

「でも、私の小屋がどこにあるか分かっていますか？」

「たぶん今は分かっています。でも前は分かりませんでした。あれ——あれ、待って！」 エミリオは興奮して言いました。ついに気づき始めたのです。「どこなのか分からない所に行け…」

「そうですよ」と、その賢女は言いました。「さあ、これをお持ちなさい」。彼女は彼の手の中に包みを置きました。「すぐに王様の所へ持ってお行きなさい。もし王様が、これを取ってくるように命じたのではないと言ったなら、これを海に持って行き、打ち壊すと王様に言いなさい。そして、海に向かって歩いている時に、棒を拾って打ち鳴らし始めなさい」

エミリオは彼女をただじっと見つめました。

「さあ、お行きなさい」と賢女は目を輝かせて言いました。

エミリオは当惑と希望が入り混じった表情でゆっくりとうなずきました。彼は賢い老女にお礼を言い、長い道のりを戻り始めました。

彼がついに宮殿の敷地にたどり着くと、王は自分の目を疑いました。

「陛下」。エミリオは宮廷に入り、「ご命令をやり遂げました。どこなのか分からない所に行って来ました。そして、これを持ち帰ってきました」と、告げました。彼は包みを差し出しました。

「それは何だ？」と、王が尋ねました。

「分かりません」と、エミリオは言いました。

けげんな表情を浮かべながら、王はその包みをつかみ取り、茶色い紙を剥がしました。中身は薄いろう引きの皮がぴんと張られた小さな丸いおけ、太鼓でした。

王は太鼓を光にかざしました。彼の額にはしわが寄りました。

「おまえは間違った場所に行ったに違いない」と、すぐさ言い、太鼓をエミリオに突き返しました。「おまえが持ち帰ったものは正しいものではない。そして、おまえは義務を果たせなかったのだから、おまえの土地、おまえの家、おまえのオリーブの木々、すべてを取り上げるために衛兵を送ることにする」

「分かりました、陛下」と、エミリオは言いました。「しかし、私は間違ったものを持ち帰ってきたのですから、それを海に持って行って打ち壊すべきでしょう」。そして、王の返事を待たずに、エミリオは宮廷を出ていきました。

海岸へ向かう道すがら、エミリオは沿道に並んでいるすべすべした数本の棒を見ました。彼は賢女の助言を思い出して、その一つを取って太鼓をドンドンと、強くたたき始めました。

ドーン！ 小さな太鼓にしては驚くべき響きでした。ドーン！ エミリオはリズムを取ってたたき始めました。ドーン！ 音が彼を包みました。ドーン！ 音は彼の中にありました。ドーン！ 音は、彼の中を通過して動いていました。ドーン！ その音は、実は彼自身だったのでしょうか？

ずんずん歩きながら、太鼓を打ち続けると、彼の意識は深く深く内側に引き込まれていきました。王、不可能な数々の仕事、家を失う恐れ、すべてが突然とても遠く離れたものとなりました。彼のマインドは穏やかになりました。そこに思考はなく、ただ音と、静けさがありました。

そして、もしエミリオが辺りを見回していたら、実際、彼の後ろに群衆が集まっていたのに気づいていたことでしょう。彼らも太鼓の音に酔いしれ、一緒に調子を合わせて行進していました。エミリオの土地を押収するために王が派遣した衛兵たちでさえ、その場で立ち止まりました。彼

らも音に合わせて動いていました。王は彼らの後ろで叫びましたが、それは届きませんでした。彼らは王のものよりももっと力強い命令に従っていたのです。

海岸に着く頃までには、エミリオの顔は光によって変貌していました。彼の存在すべてが輝きを放っていました。最後の一たたきを終えると、その音は波紋のように広がり、王国全体に鳴り響き、彼は太鼓を打ち壊し、その破片を海に放り投げました。

「どこなのか分からない所に行け。何なのか分からないものを持ち帰れ」と、エミリオは海に向かってささやきました。

やっと今彼は分かったのです。彼はいつもそこにいました。彼はいつも「それ」だったのです。



© 2019 SYDA Foundation®. 著作権所有。

この物語はレフ・トルストイの『The Empty Drum』から発想を得ています。